

際医療研究センターを統合した国立健康危機管理研究機構（JIHS）を創設し、感染症の情報収集及び分析体制を強化し、政府に質の高い科学的知見を迅速に提供、世界の感染症対策を牽引する「感染症総合サイエンスセンター」を目指す。

②感染症の科学的知見の創出や医薬品等の研究開発を行う、臨床研究ネットワークを構築し、地域の感染症危機管理においてリーダーシップを発揮できる人材を育成していく。

③重点感染症に対する医薬品等を開発し、円滑に利用できるようにするための、包括的な検討体制を構築し、企業が重点感染症に対する医薬品等への研究開発に乗り出しやすくする環境の整備を検討していく。

④予防接種データベースを整備し、予防接種の安全性等の評価に関する調査研究を実施していく。

⑤新型コロナについて下水や入国者などを対象に、重層的なサーベイランスを継続していく。また、次の感染症危機に備え、急性呼吸器感染症サーベイランスのあり方等を検討し、早期導入を目指す。

○途上国の健康医療政策を支援する「UHC ナレッジハブ」の日本設置

UHCとは、「すべての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」を指す。

2023年5月のG7広島サミットで、UHCにかかわるグローバルなハブ機能の重要性が確認され、2024年4月の世銀春会合イベントで、「UHC ナレッジハブ」を2025年に日本に設立することを発表、2024年5月のWHO総会において、次のことを発表。

- ・ハブは、低・中所得国の保健財政の強化等を目的に、WHOと世銀が連携し、各国の保健省と財務省の政策立案者の能力開発を支援
- ・設置場所は、東京エリア
- ・関係機関の代表を集めたUHCハイレベルフォーラム（仮称）を開催

2024年6月のG7プーリアサミット（於：イタリア）で、UHC推進、医療従事者のスキルアップ等への投資に貢献することが表明され、その手段の一つとして、「UHC ナレッジハブ」を位置付ける。UHCに係る知見の収集・共有し、途上国の財務・保健当局者の人材育成などを予定している。

[報告：専務理事 伊藤 真一]

閑話求題

本棚を見わたして
岩国市 小林 元壯

7年半前に持ち家から岩国駅前のマンションに転居した。交通の便など便利なこともあるが、マンションはいかにも手狭である。本棚を置くにも限界があり、書物を処分せざるを得ない状況である。その本棚を見わたしてみても目立つのは、ドナルド・キーン著作集である。全16巻の大作である。その大作を買う前にいくつかの作品を読むことがあり、特に室町文化についての造詣が深く、わび、さび、さらに幽玄の世界までこの人は実によく理解していると感じたことが契機となった。ただし、この著作集の出典は書かれた時期で異なるため、多数の翻訳者となっている。翻訳という作業にはどうしても翻訳者自身の解釈、思考過程が関わってくるために、できあがった日本語がひどく難解なものとなる宿命がある。このドナルド・キーン著作集も読みやすい部分と難解な部分とが混在している。そのことも考慮しつつ、医師の仕事辞めた後にはじっくり時間をかけて読み直したいと思っている。